

ラトビア

と
短歌

こんの
紺野 万里



二〇一〇年七月に、三カ国語の歌集『トリリンガル短歌*星状六花』を上梓しました。日本語の短歌に、英語訳、ラトビア語訳をつけたものです。

なぜラトビア語訳を、と思われるかもしれませんが。

じつは私自身、ラトビア語のことも、ラトビア共和国という国のことも、二年前まではあまり知りませんでした。ユーラシア大陸の向こうの端で、バルト海に面した国、非暴力の意志表示「人間の鎖」によってソ連から独立したバルト三国のひとつ、チェリストのミツシャ・マイスキーの出身国というくらいに知識でした。そんな遠い国とつながりができたのは、あるタペストリーとの出会いがきっかけだったのです。

石川県にある「中谷宇吉郎 雪の科学館」で「雪のデザイン

コンテスト」の展示があり、受賞作「CONNECTION」という作品を見た時、そのすばらしさにたちまち魅せられてしまいました。それは深い森のなかにしずかに降る雪、そこに差す光を表現したゴブラン織りのタペストリーで、作者はバイ・パリテールさん、ラトビア共和国からの出品でした。その時、わたしは第二歌集の準備中で、タイトルは「星状六花」と決めていました。雪の結晶の名前です。このタペストリーを見た時、どうしてもその歌集の表紙ジャケットにしたいと思い、「雪の科学館」の橋渡しでリテールさんをお願いしました。さしいわい快諾をいただき、美しいジャケットをまとって『星状六花』ができあがったのは二〇〇八年八月のことでした。

出版後、ラトビアの方では、表紙だけでなく本の内容にも興味をもってくださったようで、作品がラトビア語に翻訳されて新聞や文芸誌で紹介され、二〇一〇年の夏をラトビアで過ごすことになりました。バルト海沿いのペンツピルス市にある「国際作家・翻訳家の家」に一カ月滞在し、またラトビア作家組合主催の「詩の日々・二〇一〇年・ラトビア」という詩のフェスティバルに外国人ゲストとして参加するためです。

この本は英訳する計画があったのですが、ラトビア側から思いがけず協力の申し出があり、ラトビア語訳も付くことになりました。せっかくだから「詩の日々祭」に間に合うようにと、日本・オーストラリア・ラトビアを膨大な数の電子メールが行き交い、二〇一〇年の七夕の日に三カ国語版の『トリリンガル短歌*星状六花』は完成しました。いくつもの幸運に恵まれて誕生した本なのです。

「詩の日々祭」は、四十五年の歴史があり、毎年九月に約二週

間、ラトビア各地で朗読会など多彩なイベントが行われます。今回の外国人ゲストは二十三人、日本からは他に現代詩の方三人が招かれていました。私たちのグループは、朗読会を三回、講演、ワークショップなどを行いました。

朗読はラトビアの詩人と組んで、私が日本語で、その人がラトビア語で作品を読んでいきます。たとえばこんな風です。

ふと消ゆるもの抱くやうにをのきて生まれたる子を抱き
し朝あり

kā satverot / ko teju gaistošu / trīcot lai rītā /
turēju rokās / savu dzemdēto bērnu

みどり児のあしたの夢に降りをらむ星状六花この世のひかり

jaundzimušais / snauž sniegpilnā rītā / viņa sapnī /
vizosās drumstalas krīt / zvaigžņveida sniega kristāli

会場の人たちは、作者が日本語で読むその音に、まずは興味を持ったようです。私にとっても、自分の短歌が未知の言語で読み上げられるというのは何とも新鮮な体験で、純粹に音として楽しむこともできるのだと感じました。後に現地詩人の朗読を聞いた時にも、そう思いました。

短歌を外国語に翻訳すれば失われてしまう部分はたくさんあるのですが、それでも何かは伝わったらしく、朗読の後で、「卵の歌が好き」とか、「星状六花の歌を書いてください」と言われるのは嬉しいことでした。ラトビアには古くから「ダ

イナ」と呼ばれる四行詩があり、短い定型詩にもなじみがあるのかもしれない。辞書をたよりに、私もダイナを読んでみたいと思っています。

短歌への関心を感じる出来事がもうひとつありました。ヤーン・ス・ロゼという書店から「売りたい」と連絡が来たのです。あの本はどこで買えるのかと問い合わせがあった由。「詩の日々祭」の報道で関心を持たれたのでしょうか。ラトビアの首都リガは、旧市街全体が世界遺産で、ヨーロッパ文化の伝統を感じさせる建物が並ぶ石畳の街です。その街の書店に短歌の本が置かれるとは思ってもよらないことでした。

「ラトビアは雪です。オーバーの袖に星状六花の結晶が見えます」というメールが、きのう届いたところでした。



次号は松村由利子さんをお願いします。